

わたしのよつての福祉

一宮市立三条小学校 四年

柴山 涼乃



わたしは、九十才のひいおばあちゃんと一緒にくらしています。ひいおばあちゃんとの生活を通して、考えたことや感じたことが、いくつかあります。

ひいおばあちゃんは、一人では歩けません。家にいるときは、いつもベッドで横になっています。外に出かけるときは、車いすに乗ります。車いすでは、玄関の段差がおりられないので、大きな板をおいてスロープを作り、車いすを外へ出られるようにしています。

わたしは、ひいおばあちゃんの乗っている車いすを押して、一緒に歩いたことがありません。まっすぐで平らな道は、わたしでも押すのに力があるので、とても大変でした。わたしだけの力では、力が足りないのです、大人と一緒にないと難しいと感じました。

わたしが車いすを押すのを手伝っていたらひいおばあちゃんはわたしの方を見て、にっこりと笑いました。車いすに乗ったり、降りたりするときは、大人がおばあちゃんの体を支えて手伝っています。それは、車いすを押すときよりも、もっと力が必要です。だから、わたしは手伝えません。わたしは、車いすを押すことしかできないけれど、それでも、ひいおばあちゃんがうれしそうに笑ってくれたとき、わたしもうれしいなと思います。

ひいおばあちゃんが自分だけでできないことは、他にもあります。ひいおばあちゃんは、一人でご飯を食べることも、ベッドから起き上がることも、だれかに手伝ってもらわないとできません。わたしは、はじめ、手伝っている大人のことを大変だなと思っていました。しかし、それだけではないことに気が付きました。手伝ってもらっているときの、ひいおばあちゃんは、

「ごめんね、涼乃ちゃん。」

と、悲しい顔をすることがあります。わたしは、手伝う人が大変なだけではなく、手伝ってもらわないとできない人も、実はつらいのかもしれないと気が付きました。

今年、学校の福祉体験活動で点字の勉強をしました。そのときにもう目の方が、道や電車のホームに荷物や物が置かれていると、命に関わる事故につながると話されたので、わたしも自転車をとめるときなど気を付けないといけないと思いました。また、点字で簡単な文も打ちましたが、短い時間の中では点字をしき別することもできず、もう目の方が点字をしき別できるようになるに

は、どれだけの時間と努力が必要かを知りました。それい外にも、わたしたちはふだんの生活の中で、目が不自由でつえをついている人や、体が不自由で車いすに乗っている人を見かけたときなど、福祉について考えるき会は、たくさんあります。けれど、わたしにとって一番身近な福祉は、ひいおばあちゃんとの生活です。わたしに何ができるだろうと、よく考えます。そして、ひいおばあちゃんとの生活の中で一番大切なのは、ひいおばあちゃんの写真だと、この作文を書いて、あらためて思いました。

体の不自由な人の手伝いをするのは、簡単なことばかりではありません。どうしたら良いのか分からないときも、きつとあると思います。たとえ家族であっても、あまりの大変さになんていってしまつこともあるでしょう。けれど、手伝ってもらう相手の人が、

「ごめんね・・・。」

と悲しい顔をしていたら、わたしも悲しい気持ちになるだろうし、だれも幸せになれないと思います。わたしにとつての福祉とは、「相手の笑顔で、自分も笑顔になれるような活動をしていくこと」です。そんな福祉であふれる社会を目指す第一歩として、ひいおばあちゃんとの生活をとおして、自分にできることを、これからも一生けん命考えていきたいと思えます。